

## Nさんのこと 言友会の原点

7年位前、私が言友会に入った頃、当時実務的なことで頑張っている若手の4人の人がいました。「言友会の若手四天王」などと言い合っていました、その中の一人がNさんでした。当時から事務的なことを担い続け、東京言友会を支え続けた人です。

彼は、よく事務のしごとを担う人にありがちな、事務屋タイプの人ではありませんでした。「事務屋」というのは、何のために活動をしているのかを忘れて、もしくはそのことを逸脱して、事務処理の効率を求めてしまう人のことです。彼は、人から頼まれると否とは言えないタイプで、いつも沢山の仕事を抱え込み、その上に期日の迫った事務の仕事をしていても、電話がかかってくると長電話はするし、事務所に来ている人から話かけられるとついつい話し込んでしまい、締め切りのあるしごとでは、徹夜ということがしょっちゅうでした。仕事と重なって、もう何十時間も寝ていないでダウン寸前という状態で頑張っている眠そうな顔を今でもはっきりと覚えています。

彼は、何故かいつも気になる人です。私だけが「気になる人」という思いを抱いていたわけではないようで、グループ・ワークの時や会議の時も、その「司会」の人が、いつも最後にNさんに話を求めるようなことがありました。彼は、他者の話に共感しつつ、話がきける人でした。時には怒り、時には涙ぐみながら、よく他者の話をきいていました。一言で言えば、彼には「あったかさ」があったのです。この「あったかさ」が、言友会というあつまりの原点のような気がします。彼は、その「あったかさ」の中心であり続けていたと思います。

もう一つ、彼のことではっきり覚えているのは、講習会の場だったでしょうか、「バンライパーの随意吃」の話をしていた時に、彼が「連発性の吃音」、「難発性の吃音」を演じて見せ、最後にもう一回吃って、「これが私の吃音」と言った情景です。その時、私は「「どもり」て美しいんだ」というような思いを抱きました。言友会に来て色々な人と出会い、女性の吃音者の吃音は美しいと感じることがもう起きていましたが、それは私の「異性への思い」に過ぎない錯覚かもしれないと考えたりしていました。彼のこの情景は、私に「「どもり」って美しいんだ」という確信を抱かせてくれました。その著書『吃音学を超えて』で吃音者宣言を批判している相沢浩二という人が、その批判の核心部として、「吃音をひいては障害を美しいと言えるのか」と突き付けていることに、「言える」と応え得る確信を彼から貰いました。そのことは、私の一つの再出発点でもありました。丁度、「黒人解放運動」の中で、「ブラック イズ ビューティフル」という叫びが、その運動のカギとなる叫びであったように、彼のこの情景が、私の中で、その地平と同様な到達点に導いてくれました。

彼は、今回郷里に帰るとのことです。言友会に来ると彼に会えるという思いが、会から一定離れた私の中にもあり続けました。彼が東京言友会からいなくなるということが、考えられません。何かポツカリ穴があくような感じがします。けれど、彼も色々な思いを抱いて、東京を去る決意をしたことと思います。その「決意」は、彼の一つの出発点でもあ

るし、笑顔で送り出さねばとも思います。かの地にも言友会がすでにあります、そこで、また「マイペース」であり続け、「あったかさ」を広めて行って貰いたいと思います。また、全国の集まりなどで、彼のはにかんだような笑顔と再会できるのを楽しみにしています。最後に、もう一度、いつも呼んでいる呼び名で、「いろいろとありがとう〇〇さん」!!

1993.10.30 (送別会の日に)

今日のゲストなので、ゆっくり話もできないだろうと思い、個人宛の手紙を考えて頭の中で文案はできていたのですが、こここのところ、仕事も他の色々も忙しく1週間前には郵送しようとしたのが、「事務屋」の私には珍しく、間にあいません。この手紙は事務的な手紙ではないので、なかなか書けなかったのかもしれませんが。一朗さんへの思いを皆と共有したいという思いで『TGN』への投稿を考えているのと、全言連への投稿の締め切りがせまっているのを併せて、新聞用の文にしてしまいました。「飛んでも無い奴だ」と叱られそうです。

こここのところ忙しく、ゆっくり話もできませんでした。おまけに、『吃屹』も全言連への投稿などで休刊にしているため、手紙も書く機会を失くしていました。こここのところ、私はすっかり政治的に動いてしまっていて、会の原点の「あったかさ」の持ち主の一朗さんの視線がすごく気になっていました。

繰り返しいっていますが、私は政治好きではありません。そもそもは吃音者のおかれている状況を考え、根本的にどう変えていくのか、というところで、政治的にあらざるを得ない、というところから政治的に動いているにすぎないという心積もりです（今回の全言連の変革—「政治」もとるに足らないようなことかもしれませんが、なし得ることはなしでおかねばという思いで関わっていることです）。繰り返し、会の原点を見つめ直す、ということは頭に入れているつもりです。そういう意味で、一朗さんの視線自身が、そのことを見つめ直す一つの契機でもあり続けているのですが、……。

私の方から、一方通行のような文を送り続けるばかりで、ちゃんと対話もできませんでした。私の文の中でも比較的分かり易い文を書くときには、誰かをイメージしてその人に向けて書くということがありました。そのような時、一朗さんがもっとも多くイメージの中に登場していたと思います。

私を得るばかりで、何も一朗さんに返せなかったとの思いにもとらわれています。

これから地理的距離は離れて、なかなか直接会って話ができにくくなりますが、私の母が奈良にいますので、会う機会も作れますし、もうちょっとしたら、また『吃屹』のようなものの発刊も再開したいと思っていますので、良かったら読んでください。

手紙は手書きする積もりだったのですが、悪筆と時間をないことを理由に許して下さい。

ではとりあえず送別の文を閉じます、感謝の念を込めて!!

1993. 9. 30